

カトリック行橋小教区：主任司祭 ベリオン・ルイ神父



—ご協力をお願い—

皆さんもご存知のことと思いますが毎年全世界帯のレベルでカトリック教会は、現勢調査を行います。そのために各小教区において現勢報告書が作成されます。

行橋小教区の近年の報告書をめぐりながら気になる現象に目が留まりました。2005年に(2006年1月現在の報告書)行橋小教区における主日のミサの参加は350人だったのに対し、2008年には(2009年1月現在の報告書)250人になりました。短い期間の間に—しかも小教区の信徒総数が(2005年791名、2008年865名=+74名)増えたにもかかわらず—3分の1の減少です。

そのことに関して共同体として危機感を抱き、その現象が意味することについて共に真剣に考える必要があるのではないのでしょうか。

～小教区評議会の皆さんと検討した上で、2011年1月に2010年の現勢報告書を作成

する前に、まず主日のミサの参加者の正確な人数を把握しようというステップを踏むことになりました。～

11月中旬に4回に渡って(6土・7日)(13土・14日)(20土・21日)(27土・28日)聖堂に入る前に、一枚の用紙が渡されます。それに(男)・(女)(歳)と印刷されていますので、男性の方は(男)に丸をつけ、女性の方は(女)に丸をつけて(歳)の前に年齢を書いた後、備えられた箱に用紙を入れてください。調査の結果がまとまり次第、その内容を皆さんに報告致します。お手数をかけてすみませんが、11月中旬にミサに参加される度毎に、どうかご協力をよろしくお願いいたします。

—思いがけない訪問者— (3)

主日の感謝の祭儀の入祭行列が終わり、祭壇の脇にある書見台の前に立ちました。額に手を当てて「父と…」



聖堂の三列目の長椅子、子どもたちの席のすぐ後ろにその「人」(*)は立っています。どうも、落ち着かない様子です。聖堂の後ろへしよっちゅう顔を向けているその「人」の動作

が気になります。唇を静かに動かし、身振りで私に何かを言おうとするのだが…。



聖書の言葉が朗読される間に急にその「人」は立ち上がり、聖堂の玄関へ行く。「目立っているあまり、集まっている信者さんはきっと呆れるだ

ろう」と心配したところ、誰もその「人」に気づかないようです…。

感謝の祭儀が終わると、その「人」はそっと私に近づき、耳元で「ちょっと尋ねたいことがある」と言ったので、さっそく私の書斎へ案内しました。ドアがまだ閉まらない内にその「人」は、「ね、どうして感謝の祭儀に参加する人はこんなに少ないのですか」といきなり言い出しました。びっくりして、「私よりもあなたの方がよく知っているはずだよ」と。その思いが頭を過ぎったのですが黙ってしまいました。

～その「人」も黙っていたから、「知っているかどうかかわかりませんが、信者の皆さんは毎日一生懸命に働いているから疲れていますよ。多くの信者にとって日曜日は唯一の休みだから毎週教会に行き、感謝の祭儀に参加することは楽なことではないよ。」と思わず私は信者の立場を弁明し始めました。

勢いあまって付け加えました。「毎週、感謝の祭儀に参加していないからと言って、信仰が消える訳ないでしょう」と。

その「人」は鋭い目つきで私を見つめて答えました。「確かにそうですけど、参加するための努力はその信仰が活着しているしと証しではないか」と。そして首をかしげて、「日曜日に出来ない努力が平日には出来るかな」と放心した様子でささやきました。～

更に溜息をついて「わからないことがもう一つある」とその「人」は話し続けようとした。「今日はもういいよ。信者を待たせているから、ごめん」とぶっきらぼうに呟き、その「人」を放っておいて外に出た…。



感謝の祭儀に集まっていた信者たちが、驚きと戸惑いの目でほんやりしている私の顔をじっと見つめています。「おい、お前は何をして

いるの？もっと集中しろよ」と自分を厳しく咎めながらも一度額に手を当てて「父と」…。

*6月号(No.36)、9月号(No.39)、10月号(No.40)